

# 比較教育社会史研究会通信

2007年7月15日 第6号

シンポジウム「歴史のなかの教育と社会－比較教育社会史研究の来し方行く末」

## 記 録 と 雑 感

岩 下 誠 (日本学術振興会特別研究員・青山学院大学)

2007年5月12日(土)、青山学院大学において開催された本シンポジウムは、タイトルの通り、発足から現在までの比較教育社会史研究会の成果を総括し、今後を展望するという内容であった。広田照幸氏(日本大学)の司会の下、橋本伸也氏(関西学院大学)、小田中直樹氏(東北大学)、今井康雄氏(東京大学)、森直人氏(岐阜聖徳学園大学)による報告が行われた。

始めに、本研究会において中心的な役割を果たしてきた橋本氏から、現下の研究の到達水準と今後の課題について報告がなされた。まず、先行する教育社会史研究に対する本研究会の位置づけがなされ、続いてこれまでの研究会の活動と現在の到達点が示された。最後に、今後の展開として、1990年代以降の世界状況のなかで教育をめぐる課題を歴史的にどう把握するか、という問いが提起された。続いて小田中氏は、本研究会の成果を、伝統的な教育史から明らかに脱却していると評価した。その上で氏は本研究会の対象が近代に偏っていると指摘し、前近代・近代・現代の差異が意識されているか、「教育」概念に対する自己反省は十分か、学際性の問題として隣接領域の成果や理論をツールとして有効に使えているか、教育学固有の視点から従来の歴史学の方法論がどう捉えなおされるのか、といった論点を提示した。今井氏は、研究会の成果を、近代教育に対する事実のレベルでの相対化を達成していると評価した。他方で、教育政策などのマクロレベルでは、教育者側の意図の屈折と意図せざる結果というプロセスを描くことができているが、ミクロレベル、相互行為のレベルでの実証が弱いと指摘した。森氏は、近年の研究会の成果が、「統合と排除」「支配と従属」といった一元的なマクロ構造に還元されない重層的な諸相を解明している反面、機能への視点がやや弱

められ「構造変動」を描ききれていないのではないかと指摘し、併せて、教育の構造、機能、主体の相互連関を明らかにするため、社会化機能の具体的な描出の必要性があるとした。

その後の質疑応答で提出された論点は、主として次のようにまとめられる。まず、大きな枠組みとしては、従来の教育史研究に対する総括および本研究会がそれらをどう乗り越えていくかという点が、方法論やフレームワークの観点と、教育学の理論的な観点の双方において問われた。それと関連して第二に、比較教育社会史という学際的な研究領域の性格と、今後の展望をどのように考えるか、という論点が提出された。具体的には、教育の経済的機能をどのように説明するか、教育の公共性を、国家のプレゼンスの低下という事態と絡めてどう考えるべきか、学習主体の経験や、ミクロな相互行為をどのように描きうるかといった論点が出され、いずれもフロアと報告者の間で活発な議論がなされた。

個人的には、橋本報告の、過去20-30年に蓄積されてきた歴史像(近代教育批判)を前提としつつも、それらの議論から論点を大きく移す必要があるという指摘に大きく頷いた。恐らくは少なからぬ教育史研究者が感じている閉塞感を適切に言い表していると感じられたからである。護教論的教育史は政治史・経済史と噛み合う議論ができていないと広田氏が発言していたが、それらを批判していたはずのポストモダンの教育史研究もまた観念的な批判に終始した(今井氏)という点では、広田氏の指摘がそのまま当てはまってしまっただろう。そのことが、ポストモダンの近代教育批判もまた、現在政治的に去勢されている一因であるように思われる。そして他方、近代学校教育の普及を目指している多数の国や地域が存在することを考えるならば、教育の経済機能を

単なる選抜機能のみならずコンテンツまで含んで説明すべきであるとした広田氏や森氏の指摘、および前近代や現代まで射程を伸ばした上で近代教育の概念定義を反省すべきであるとする小田中氏や松塚俊三氏が提出した論点は、最新刊における帝国という枠組みと並んで、比較教育社会史の新たなブレイクスルーのために、必要不可欠であるように思われる。

また、今後の展望として、ミクロな分析の充実と、比較対象の拡大や世界史の構築という、一見相反するような提案がなされたが、この議論は、国際教育史学会機関誌 *Paedagogica Historica* で2001年になされた論争を想起させた。女性史を除いて、現在の教育社会史は新しさを失いながら、他方で教職科目としてのレリバンスも喪失したのではないかという Jurgen Herbst による挑発的な問題提起に対し、

Milton Gaither はグローバルゼーションという枠組みを設定することによって、トランスナショナルな教育史を再び描く可能性が得られるとし、Kate Rousmaniere は、クラスルーム史といった近年のミクロな社会史が、学際的で新しい教育史研究の分野を開拓し続けていると応答している。ほぼ並行するような内容であるが、東欧や日本まで含めた「比較」という視点を有する分、本シンポジウムの議論はさらに深い射程を持ち得たように思われる。マクロ、ミクロ、どちらの路線を選択するにしても、領域、方法の双方において、今後はますますハイブリッドな研究が求められるであろう。そのためにも、「知のネットワーク」というあり方を堅持するという方針が、今回のような総括と展望の場で確認されたことは、非常に喜ばしく思われた。

## 『帝国と学校』合評会

神代健彦（一橋大学大学院生）

大会2日目の午前中、『帝国と学校』の合評会が行われた。編者である橋本伸也先生（関西学院大学）が司会をつとめられ、評者に平野千果子先生（武蔵大学）、木畑洋一先生（東京大学）を迎えての会であった。

まずは編者であり司会の橋本先生より、企画の背景を交えた本書の説明がなされた。それによれば本書は、これまでの叢書・比較教育社会史を通低する国民国家論の枠組みの成果と課題を受けたものであるという。それが、本書のタイトルである〈帝国〉ないし〈植民地〉への着目であり、「一国史」的な研究となりがちな国民国家論の枠組みを相対化するため、〈帝国〉や〈植民地〉とかかわらせつつ、学校・教育の構造を新しい視角から見るのが、本書の基本的なテーマであるとのことであった。

その後評者2人から、ご自身の研究を踏まえつつ論評があった。平野先生のコメントは、大きく2つに分けられる。「〈帝国〉とはなにか」という点と、「支配される側の主体性」、ないしその「重層性」の2つである。これらは今回の合評会全体を貫く2大論点であった。またそれらは、それぞれさらにいくつかの個別論点を含んでいた。内容は多岐にわたったが、前者に関しては、〈帝国〉類型の妥当性や、帝国主義の展開と深い関係にあると思われる〈文明化〉という概念、また後者に関しては、支配者側の統制下にある学校に被植民者が通うということの意

味について、などの論点は非常に印象に残った。

続く木畑先生からのコメントは、先ほどの2つの論点を別の角度から述べたものであった。具体的には、「〈帝国〉とは何か」という点に関連して、あたかも迷宮のような様相を呈する「複数の帝国の世界史的な同時代性のなかでの相互の連関（関係）」を認識するための「比較」という本書の分析視角に対して肯定的評価が与えられ、また（各章でそれぞれ指摘されている）支配に対する被支配者側からの反応の多様性を考察することの重要性が改めて提起された。ただし、本書の傾向として全体的に制度論が強く、教育の内容への踏み込みが弱いことなど、いくつかの批判も為された。

新たな論点や批判を含むこれらのコメントを受け、執筆者側からの応答は、本書のもう一人の編者である駒込武先生から順になされていった。以下、その大枠を示したい。

駒込先生からは、ホブズボームの定義を基礎としつつ展開された〈帝国〉の類型について、執筆経緯を振り返りつつ応答があった。印象に残った点を挙げれば、〈帝国〉の類型・比較それ自体が目標となるのではなく、（木畑先生が肯定的評価を与えた）その作業を経た上で描かれるそれぞれの連関・関係が叙述されることが、強く意識されていたという点、また、抵抗する主体と同化する主体を二律背反として描くのではなく、それらが並存するものとして被

教育者がイメージされていたという点などである。

その後の議論は、「〈帝国〉とは何か」という点に関連して、橋本、京極、大津留、李、小檜山の各先生方が、また被教育者の主体性に関して北村、古川、長の各先生方が応答される形で進行した。前者に関しては、冒頭で駒込先生が設定した〈帝国〉類型をもう一度敢えて相対化する契機となるような様々な差異が、各論者から提起された。その過程では、「非公式の帝国」というネーミングをめぐる木畑先生と小檜山先生の議論の応酬があったりと、合評会ならではのエキサイティングな場面が垣間見られた。一方後者に関しては、具体的な支配—被支配構造のヒエラルキーを前提に、その中での学校の位置づけや、構造そのものの重層性など、より教育研究として焦点化された議論がなされた。

以上が、今回の合評会の基本的な流れであった。概して言えば、ここまで紹介した過程から垣間見えるように、最初に示された2つの大きな論点が、フロアも含めた議論のなかで徐々に明確なイメージとして深化していったと言えよう。会場の応答を通して、(さまざまな異論を含みつつ)対象に対する認識が深化していく過程を体験しえたことは、非常に貴重なものであった。惜しむらくは、2大論点として整理された大枠の議論のかげにかくれて、魅力的

な個別論点への言及が(提起はされていたにもかかわらず)聞かれなかった点である。それは例えば、言語教育の問題であり、また帝国における女性の問題などであった。言うまでもなく本書で対象となった諸〈帝国〉は、特定の言語圏を越境して拡大していったものであり、そこに様々な葛藤が含みこまれていたことは、本書の複数の論文が明らかにしたところである。また、被教育者の主体性と一口に言っても、それは様々な差異の存在する人々の集団であり、そのなかで女性／男性という区分は重要な差異の1つである。これらの問題に切り込む有益な視点は、本書の各論文において数多く提起されていただけに、執筆者のほとんどが一同に会したこの場において、より踏み込んだ議論が行われなかったことは、非常に残念であった。

しかしいざれにしても、やり取りのなかではしばしば『『帝国と学校』第2弾を是非』という声が挙がっていたことからわかるとおり、本書及び今回の合評会は、非常に刺激に富み、今後の〈帝国と学校〉研究に関して大きな可能性を示すものであったといえよう。当の私も、改めて自身の研究の「一国史」的な側面を強く反省させられたという意味で大いに刺激を受けた1人であり、また何らかの形で「第2弾」を密かに希望する次第である。

## セッション 「識字と読書」

蝶野立彦(早稲田大学)

比較教育社会史研究会大会のセッション「識字と読書」は、今回で4回目の開催となった。当日の報告会では、まず山口美知代氏(京都府立大学)が近代イギリス言語教育史の視点から「イギリスの読み書き教育と綴り字改革運動——ロンドン学務委員会の請願運動(1876-8)と『読み書き能力』の意味」というタイトルで報告をおこない、次いで永嶺重敏氏(東京大学駒場図書館)が近代日本読書文化史の視点から「東京大学における左翼学生の読書文化」というタイトルで報告をおこなった。第2回(2005年10月)及び第3回(2006年3月)の大会報告会でなされた報告はいずれも「読書」の問題を中心テーマに据えたものであったが、今回の報告会では、山口氏の報告が「識字教育」の問題を、そして永嶺氏の報告が「読書文化」の問題をそれぞれ中心テーマに据えており、その点で本セッションの本来のテーマ設定に沿った内容構成となった。

山口氏の報告では、公的初等教育の普及のための行政機関であったロンドン学務委員会が《綴り字改革に関する王立調査委員会の設置》を求めて1870年代におこなった請願運動に光が当てられ、その請願運動の分析を通して、19世紀後半のイギリスにおける《読み書き教育推進派》の主張がいかなる《読み書き能力》観に支えられていたのか、という問題が論じられた。不規則な英語の綴り字をより表音的で規則的なものにしようとする《綴り字改革必要論》そのものは16~19世紀のイギリスで繰り返し提唱されたが、1870年代の請願運動のなかでは、そうした綴り字改革論がとりわけ《公的な読み書き教育の効率化のための方策》として唱えられた。そして山口氏の分析によれば、このような《読み書き教育の効率化のための綴り字改革》の主張の、その教育思想的背景を成していたのは、《正確な書き言葉の修得》と《正確な発音の修得》とを一対にして不可分

の課題と見なす《読み書き能力》観であり、しかも、当時の基礎学校における言語教育がディクテーションを主体とするものであったことから見てとれるように、そのような《読み書き能力》観は、19世紀後半のイギリスの言語教育の趨勢そのものを反映していたのである。近代ヨーロッパ教育史・文化史に関する論述のなかでは《公教育を通じての大衆の識字能力の向上》と《文字文化の浸透》という側面が強調されることが多いが、今回の報告は、《識字能力の育成と書き言葉の規範化》を目指す19世紀の公教育思想が実は《語り言葉の規範化》の思想によって裏打ちされていたことを明らかにした点で、興味深いものであった。

永嶺氏の報告では、明治期以降の日本の読書文化の重要な担い手としての《学生層》に光が当てられ、特に東京（帝国）大学のケースを例に取りながら、大正期～戦時体制下～戦後の東大の学生たちの読書文化の変遷が論じられた。同報告によれば、大正中期から1960年代に至るまで、学生たちの読書文化の主たる思想的バックボーンであり続けたのは、社会主義（ないしマルクス主義）の思想であった。そしてこの時期には、左翼図書収集・回読をおこなう「帝大新人会」や労働者階級への読み聞かせ・教化活動を目的とした「帝大セツルメント」のような学生団体、あるいは書籍・雑誌の廉価共同購入をおこなう「学生消費組合」や「協同組合」などの組合組織が、学生たちの読書文化の組織的・物質的基盤として重要な役割を果たしており、またそれゆえに、この時期の学生たちの読書活動は——自分たちの本を共同で入手し、共同で読み合う、という意味での——《共同的営み》としての性格を色濃く備えていた。ところが1970年代以降、学生たちの間で《エリート意識の衰退》と《読書内容の大衆化》

さらには《孤読化》が進行してゆくなかで、旧来の《共読》の伝統は失われ、さらにそれに伴って《学生固有の読書文化》そのものも次第に消滅していった、と永嶺氏は分析する。このように今回の報告では、大正期～1960年代の学生の読書文化の特徴が《左翼思想をバックボーンとする共同的読書》という側面から総括されていたが、（読み聞かせや読書集会といった形態による）《共同的な読書行為》という論点は実は近世ヨーロッパ史の研究のなかでも盛んに取り上げられている論点であり、そうした観点から見ても、大変に興味深い報告であった。

本『通信』第5号の「識字と読書」セッションについてのコメントのなかで八鍬友広氏は「読書論のなかに識字論をどのように組み込むべきか」という問題提起をおこなっておられるが、今回の二つの報告に接して改めて感じさせられたのは、《個々人の識字能力の向上（育成）》という契機と《読書の実践》という契機の間には直線的かつ予定調和的な連続的関係性を措定することの困難さであった。即ち、《個々人の識字能力の向上》を目指したはずの近代ヨーロッパの公教育思想が実は《語り言葉に対する教育的・イデオロギー的関心》によって強く規定されており、また逆に、近代日本の学生たちの《読書実践》において《（個々人による識字をかならずしも前提としない）共同的な読書のスタイル》が重要な役割を果たしていたとするならば、これらの現象のなかに《個々人の識字能力 ⇒ 読書実践》という単純な連続的関係性を読み込むことはできないはずである。むしろ、多様で具体的な歴史現象を踏まえながら《個々人の識字能力 ⇒ 読書実践》という従来の識字論・読書論の基本構図を相対化してゆく、そうした方向性のなかに本セッションの可能性が秘められているようにも感じられた。

## 比較教育社会史研究会に参加して

長谷部 圭彦（東京大学大学院生、日本学術振興会特別研究員）

さる5月12・13日、青山学院大学において、比較教育社会史研究会の春季大会が開催された。その詳しい模様は、本通信に掲載されている他の諸氏のご報告を参照していただくとして、ここでは、私の専門である「オスマン帝国教育史」に即した、研究会および新刊の『帝国と学校』の感想を述べたい。そのためには、まず、我が国においてあまりに知られることの少ない「オスマン帝国教育史」について、

ごく簡単に紹介する必要がある。

オスマン帝国（1299–1922）は、ヨーロッパ・アジア・アフリカの三大陸を、600年以上にわたって支配した、世界史上屈指の大帝国である。我が国では、かつて、「オスマン＝トルコ」あるいは「トルコ帝国」などと呼ばれていたが、この国家には、イスラーム教徒（ムスリム）のトルコ人だけでなく、ギリシア正教徒・ブルガリア正教徒・アルメニア使

徒教会教徒・ユダヤ教徒といった非ムスリムも多数存在し、さらに、同じムスリムではあるが、トルコ語とはまったく異なる言語系統に属するアラビア語やクルド語を母語とするアラブ人やクルド人も存在していたので、近年ではこの王朝を、「オスマン帝国」あるいは「オスマン朝」と呼称するのが一般的である。

このような多様性をもつオスマン帝国の、前近代における学校教育は、原則として宗教共同体ごとになされるものであり、国家が直接介入する営みではなかった。たとえば、ムスリムのための初等教育機関であるクッターブでは、聖典『コーラン』の暗誦をはじめとして、アラビア語の読み書きやイスラームの初歩的な戒律が教えられ、高等教育機関であるマドラサでは、解釈学・伝承学・法学・アラビア語文法学などが教授されたが、いずれも、宗教寄進財産（ワクフ）によって運営され、国家がこれらを直接管理していたわけではなかった。非ムスリムの教育機関においても、ほぼ同様に、基本的に宗教と関わりのある諸学が教えられ、オスマン政府の干渉は受けていなかった。

しかし、18世紀後半以降、こうした宗教共同体ごとの学校と併存する形で、国家による教育機関が設立されはじめた。すなわち、西欧の軍事的脅威に対抗するために軍事諸学校がまず設立され、ついで、中等レベルの学校や、文官養成のための学校が、相次いで設立された。さらに、中央政府のなかに、教育行政を扱う部局や省庁も設置され、体系的かつ包括的な教育行政法規も制定された。このように、「近代」以降、オスマン帝国においても、同時代の他の地域においても見られるような教育改革が遂行されたのである。これを以って、近年のオスマン史研究者は、教育現象の「世界史的な同時性」を強調しているが、興味深いことに、この表現は、『帝国と学校』においても散見される。したがって、この「同時性」への着目は、オスマン史研究者と教育史研究者との間の有意義な対話を可能にする一つの手段となるであろう。

そこで、この「世界史的な同時性」に着目してみると、「比較」を名称に冠する本研究会ならではの魅力的なテーマを設定することが可能になる。すな

わち、こうした「世界史的な同時性」を経験した地域の教育史を、他の地域の事例を視野に入れつつ叙述したならば、あるいは、なんらかのテーマ、たとえば、初等教育の法制化、総合大学の設立、女子教育の制度化、教育行政法規の制定、改革モデル国の選択、秩序原理と学校教育といったテーマについて、比較史的に議論したならば、従来の教育史を書き換えることが可能になるであろう。また、そこで得られた知見は、教育史のみならず、歴史学一般にも有用であろう。さしあたりここでは、上述のテーマのうち、「初等教育の法制化」と、「秩序原理と学校教育」の二点について、ごく簡単に触れたい。

オスマン帝国における初等教育の実質的な法制化は、1869年であった。これは、ハプスブルク帝国におけるそれと、まったく同年である（『帝国と学校』）。オスマン帝国について言えば、法制化のアイデア自体はそれ以前から存在したものの、その実現が両帝国でまったく同年であったということは、非常に興味深い。また、秩序原理と学校教育について言えば、その前年の1868年に、オスマン帝国においてもロシア帝国においても、従来の秩序原理とは異なる学校が設立された。すなわち、オスマン帝国では、上述のような宗教ごとの学校ではなく、ムスリムと非ムスリムがともに学ぶ「皇室学校」が設立され、ロシア帝国においては、従来の「身分や宗派要件に代えて…財産資格を入学条件」とする、「皇太子ニコライ記念リツェイ」が開校した（橋本他『エリート教育』）。こうした、まさに「世界史的な同時性」と言い得る現象は、単なる偶然とは考えにくい。おそらく、三国とも、同じように悩みを抱え、同じように解決手段を模索していたのであろう。このように、オスマン帝国は、ハプスブルク帝国やロシア帝国と、極めて興味深い類似点を有している。「比較帝国史研究というアリーナ」に、私も参加したいと願う所以である。

最後に、「オスマン帝国教育史」の重要性が記されていた『帝国と学校』の「あとがき」を拝読し、気持ちを密やかに昂ぶらせたこと、そして、その状態のまま研究会と懇親会に参加し、知的好奇心が大きい刺激されたことを、申し上げたいと思う。諸先生方に、心より御礼申し上げます。

# 【資料1】 比較教育社会史研究会のあゆみ(2001-2006)

## ◇2001年 研究会発足準備会(2001年3月31日、京大会館)◇

『高等教育の変貌』『エリート教育』合評会 駒込武(京都大学)、研究会発足に向けた打合せ  
村岡健次(甲南大学)

## ◇2002年発足大会(2002年3月23・24日、同志社大学)◇

記念講演 望田幸男(同志社大学)「比較資格社会論の問題水域」  
研究報告(1) 沢山美果子(順正短期大学)「歴史のなかの女の身体—日本における性・生殖・身体の世界史のために—」  
研究報告(2) 松塚俊三(福岡大学)「民衆にとっての公教育とは—19世紀イギリスの公教育史と歴史学—」

第1分科会 身体と医療の教育社会史  
(1)小野直子(富山大学)「アメリカ合衆国における医療の専門職化と医学教育改革」  
(2)西尾達雄(鳥取大学)「植民地朝鮮における身体教育」

第2分科会 ネーションとエトノスの教育社会史  
(1)奥田純(高松高専)「スコットランド・ナショナルリズムと歴史教育—19~20世紀転換期を中心に—」  
(2)渡辺和行(奈良女子大学)「近代フランスの歴史教育」

第3分科会 実業世界の教育社会史  
(1)広瀬信(富山大学)「イギリスにおける技術者養成の歴史的展開」  
(2)森直人(東京大学大学院)「鶴岡工業学校について」

## ◇2002年秋季例会(2002年9月23日、京都府立大学)◇

第1分科会 身体と医療の教育社会史—叢書刊行への報告検討会  
第2分科会 ネーションとエトノスの教育社会史—叢書刊行へ

の報告検討会  
第3分科会 実業世界の教育社会史—叢書刊行への報告検討会

## ◇2003年春季大会(2003年4月5・6日、同志社大学)◇

記念講演 村岡健次「教育と宗教—近代イギリス民衆教育史への一視角」  
セッション1「教師と教職の社会史」  
(1)松塚俊三(福岡大学)「イギリスの労働者は何をどのように学んだか、学校の中でも外でもなく—読書の社会史と教育史」  
(2)高木雅史(福岡大学)「学校・家族の関係をめぐる一断面—戦後初期「教育相談」で教師・親は何を相談したか—」  
(3)横原 茂(島根大学)「Peasants into Frenchman 再考」

セッション2「帝国と学校」  
(1)駒込武(京都大学)「『帝国と学校』をめぐる座長からの問題提起」  
(2)大津留厚(神戸大学)「ハプスブルグ帝国における教育と民族」  
(3)並河葉子(神戸市外国語大学)「女性を対象としたミッション・スクールの役割」  
(4)橋本伸也(広島大学)「報告へのコメント—ロシア帝国の場合との比較を通じて—」  
叢書『比較教育社会史』編集打合せ・検討会

## ◇2003年秋季例会(10月25日、同志社大学)◇

『身体と医療の教育社会史』合評会 三成美保(摂南大学)・田間泰子(大阪産業大学)

全体セッション「教師と教職の社会史」  
(1)天野千恵子(愛知県立大学)「アンシャン=レジーム期フランスの農村における初等学校教師」

(2)青木利夫(広島大学)「20世紀前半のメキシコにおける農村学校と農村教師」

「教師と教職の社会史」部会  
(1)石垣里枝子(フェリス学院大学・院生)「アイルランドのヘッジスクールについて」

## ◇2004年春季大会(2004年3月27・28日、同志社大学)◇

記念講演 辻本雅史(京都大学)「<教育のメディア史>の試み—日本近世の場合—」

全体セッション「帝国と学校」  
(1)井野瀬久美恵(甲南大学)「ミッション・スクールの顛末—アベオクタ・グラマー・スクールの子どもたち—」  
(2)奥田 純(高松工業高専)「井野瀬報告へのコメント—大英帝国史の視点から—」  
(3)橋本伸也(広島大学)「教育システムの帝國的構造—ロシア帝国と中央アジア朝鮮人の事例に則して—」  
(4)駒込武(京都大学)「報告へのコメント—日本教育史の視点から—」

『ネーションとナショナルリズムの教育社会史』合評会 増井三夫(上越教育大)・中谷猛(立命館大)

「教師と教職の社会史」部会  
(1)塚本有紀(奈良女子大学大学院)「ヴィクトリア時代後期における女性教師」  
(2)三時眞貴子(尚絅大学)「19世紀イングランドにおける視学官制度—クロス委員会報告書を手がかりに—」

「女子教育の比較社会史」部会  
香川せつ子(西九州大学)「『女子教育』の比較社会史をめざして—新しい部会の発足に当たって—」

## ◇2004年秋季例会(2004年10月16日、同志社大学)◇

橋本伸也『エカテリーナの夢ソフィアの旅』合評会 島山禎(名城大学非常勤)・阪本佳代

『実業世界の教育社会史』合評会 渡辺和行(奈良女子大学)・菊池城司(吉備国際大学)

## ◇2005年春季大会(2005年3月26・27日、同志社大学)◇

セッション1「高等教育とジェンダー」  
(1)小山静子(京都大学)「女子高等教育論の地平—女子用高等教育機関としての短期大学の成立—」  
(2)堀内真由美(大阪大学大学院)「イギリス女子教育の海外展開—19世紀末から大戦間期を中心に—」  
(3)コメント 濱名篤(関西国際大学)・河村貞枝(京都府立大学)

セッション2「識字と読書」  
(1)松塚俊三(福岡大学)「セッションへの問題提起」  
(2)山之内克子(神戸市外国語大学)「18-19世紀ウィーンにおける読書文化」  
(3)八鍬友広(新潟大学)「近世日本における『読むこと』『書くこと』」

セッション3「帝国と学校」  
(1)奥村庸一(元北海道大学院)「19世紀ロシアの初等学校とムス

リム問題ー帝国による『異族人』統合のあり方を巡って」  
(2)京極俊明(名古屋大学大学院)「ハブスブルク帝国の初等教育

における言語・民族問題ーモラヴィアの事例より」

◇2005年秋季例会(2005年10月22・23日、同志社大学・京都府立大学)◇

- 「帝国と学校」部会  
(1)小椋山ルイ(東京女子大学)「東アジアにおけるアメリカの  
＜非公式帝国＞の形成と女性宣教師の役割」  
(2)長志珠絵(神戸市外国語大学)「ツーリズムの空間ー女高師の  
『満鮮』修学旅行」  
(3)北村嘉恵(北海道大学)「日本植民地下台湾における先住民教育  
の普及過程ー台湾総督府の就学『督励』策の諸相」

- 会的位置をめぐるー」  
(2)長友千代治(仏教大学)「近世日本における読書と読者」

「帝国と学校」部会ー執筆者打合せ

- 「識字と読書」部会  
(1)蝶野立彦(早稲田大学)「宗教紛争と教化の狭間の読書行為ー  
16・17世紀のドイツ・プロテスタント地域における読書の社

- 「高等教育とジェンダー」部会  
(1)佐々木啓子(創造学園大学)「戦前期日本の女子高等教育にお  
けるレジティマシーの構造」  
(2)阪本佳代(鹿児島純心女子中学・高等学校)「19世紀フランス  
女子教育における『講座』」

◇2006年春季大会(3月27・28日、東京大学)

記念講演 尾高煌之助(一橋大学名誉教授)「20世紀日本経済シ  
ステムを振り返るー今後の展望を得るためにー」

『国家・共同体・教師の戦略』合評会 寺田光雄(埼玉大学名誉  
教授)・木村元(一橋大学)

- セッション1「高等教育とジェンダー」  
(1)高橋裕子(津田塾大学)「日米の女性と高等教育ー女子英学塾  
とプリンマー大学の周辺からー」  
(2)報告へのコメント 有賀夏紀(埼玉大学)

- セッション2「識字と読書」  
(1)山田史郎(同志社大学)「建国期アメリカにおける印刷物と読  
者」  
(2)横田冬彦(京都橘大学)「近世の軍書と<歴史>」

## 【資料2】『叢書・比較教育社会史』総目次

望田幸男・田村栄子編『身体と医療の教育社会史』(2003年)

- 序「身体と医療の教育社会史」よせて(望田幸男)
- 第I部 身体教育と身体の規律化  
第1章 食をめぐる身体の規律化の進展ー近代ドイツにおける  
栄養学と食教育(南直人)  
第2章 身体教育と国家・カトリック・共和派ーフランス第三  
共和政期に見る(亀高康弘)  
第3章 五月祭の<メリー・イングランド>像ー一九世紀英国  
における祝祭の変容とフォークソング復興運動(松井  
良明)  
第4章 植民地支配と身体教育ー朝鮮の場合(西尾達雄)
- 第II部 医の制度化による統合と排除  
第5章 医師の「量」と「質」をめぐる政治過程ー近代日本に  
おける医師の専門職化(橋本鉉市)  
第6章 専門医制度の成立とオルタナティブ医療ードイツのホ  
メオパシー医にとっての医師職業団体と患者組織  
(服部伸)  
第7章 医療の専門分化と産科学の台頭ーアメリカ医学界にお  
ける産科学の地位(小野直子)
- 第III部 医の世界とジェンダー  
第8章 在村医の診察記録が語る女の身体ー日本における近世  
から近代への展開(沢山美果子)  
第9章 女性医師課程の誕生と消滅ー帝制期ロシアにおける女  
性医師と医学教育(橋本伸也)  
第10章 医学と女子高等教育の相克ーヴィクトリア期における  
「女性の身体」(香川せつ子)  
第11章 「医の既存世界」を越える「女性個人の身体」論ーワ  
イマル期「ドイツ女性医師同盟」に見る(田村栄子)

望田幸男・橋本伸也編『ネイションとナショナリズムの教育社  
会史』(2004年)

- 序章 ネイションとナショナリズムの教育社会史ー主題と問題  
群(橋本伸也)
- 第I部 近現代ドイツのネイションと教育  
第1章 田園都市運動におけるナショナリズムの変容ードイツ・  
ヘレラウの教育施設にみるナショナリズム(山名淳)  
第2章 ワイマル期の「ネイション」とギムナジウムードイツ  
語授業よせて(望田幸男)  
第3章 クライザウ・グループとキリスト教教育の復権(對馬

- 達雄)
- 第4章 「西ドイツ国民」創出と政治教育の試みー連邦政治教育  
センターの足どり(爲政雅代)
- 第II部 マイノリティとネイションの教育  
第5章 ライシテと宗教的マイノティーーフランス第三共和政初  
期の教育改革とプロテスタント(上垣豊)  
第6章 移民と母語教育の条件ー二〇世紀初頭フランス・ポー  
ランド人炭坑移民の場合(中村年延)  
第7章 帝国とネイションと学校ー帝制期ロシア西部国境地域  
の教育構造と「ロシア化」(橋本伸也)
- 第III部 歴史教育とネイション  
第8章 ジェントルマンの教養とシティズンシップーイングラ  
ンドの国民形成と歴史教育(中村勝美)  
第9章 スコットランド・ナショナリズムと歴史教育一九〜二  
〇世紀転換期を中心に(興田純)  
第10章 英雄とナショナル・アイデンティティーー第三共和政フ  
ランスの歴史教育とナショナリズム(渡辺和行)  
第11章 ブルクハルトの歴史教育活動とバーゼル大学(森田猛)

望田幸男・広田照幸編『実業世界の教育社会史』(2004年)

- 序章 「実業世界の教育社会史」の可能性(広田照幸)
- 第I部 ビジネスエリートの世界  
第1章 近代企業エリート層と教育の機能についてー二〇世紀  
初頭の日本・ドイツ・イギリス三国の比較の視点から  
(中岡俊介)  
第2章 就職委員会と実業界に向かった卒業生たちー二〇世紀  
前半におけるケンブリッジ大学の変容(福石賢一)  
第3章 マールベルク家の人びとー近代ドイツにおける商科大  
学の社会的機能について(早島瑛)  
第4章 高等商業学校におけるビジネスマン養成ー戦前期日本  
の地方都市における高等教育機関の社会的機能(山田  
浩之)
- 第II部 テクノロジーの担い手  
第5章 一九世紀フランスのエンジニア養成と実業世界(堀内  
達夫)  
第6章 技術者の教育・訓練歴の変容ー一八八〇年代〜一九三  
〇年代のイギリスの場合(広瀬信)  
第7章 ドイツにおける技師の多層性ー技師学校の展開と消滅  
(佐々木英一)

- 第8章 染織学校から工業学校へ—学校機能の変容と地域産業 (橋野知子)
- 第9章 実業学校の〈中等学校化〉の軌跡—戦前期日本における「中等学校」の使用慣行の成立 (米田俊彦)
- 第Ⅲ部 ノン・エリートの世界
- 第10章 中等技術教育の拡張と生徒の社会構成—ロシアにおける産業発展と身分制 (畠山禎)
- 第11章 鉄道従業員の採用・昇進競争—戦間期国鉄の学歴格差を中心に (広田照幸)
- 第12章 ドイツ職員団体の教育活動—新中間身分創出の試みとその歴史的役割 (吉岡いずみ)
- 第13章 知の喜びと仲間のために—前世紀転換期イギリスの労働者成人教育運動 (松浦京子)

松塚俊三・安原義仁『国家・共同体・教師の戦略—教師の比較社会史』(2006年)

- 序章 教師の比較社会史にむけて (松塚俊三・安原義仁)
- 第Ⅰ部 国家と共同体のはざま
- 第1章 一八世紀フランスの初等学校教師—ピエール＝ルイ＝ニコラ・ドゥラエの「日記」を読む (天野知恵子)
- 第2章 共同体における農村教師と住民—二〇世紀前半のメキシコ農村教師の証言 (青木利夫)
- 第3章 地下学校の教師—一九世紀後半～二〇世紀初頭ロシア帝国領ポーランドの教育 (塚本智宏)
- 第4章 連合王国成立期アイルランドの民衆の教師—ヘッジ・スクールから国民学校へ (石垣里枝子)
- 第5章 教師の多様性と国家による整序化—一九世紀末イングランドの基礎学校教師 (三時眞貴子)
- 第6章 国家の官吏か専門職業人か—一九一七年プロイセン教員試験規程の成立と中等教員像 (吉岡真佐樹)
- 第Ⅱ部 教師の日常世界と心性
- 第7章 教育実習と実習生の成長過程—大正期石川県女子師範学校生徒の「教育実習日誌」から (柏木敦)
- 第8章 高等師範学校生のライフストーリー—戦前期日本における中等教員像の形成 (山田浩之)
- 第9章 日記と手紙にみる女性教師の心性—一九世紀アメリカにおける教師像とその実際 (佐久間亜紀)
- 第10章 女性中等教育の改革と教師の苦悩—ヴィクトリア期イングランドの女子中等教育 (塚本有紀)
- 第11章 教師と心理学テクノロジー—戦後初期日本における

「教育相談」の導入 (高木雅史)

- 第Ⅲ部 共有される知とその文化
- 第12章 独学の文化—一九～二〇世紀のイギリス労働者は何をどのように学んだか (松塚俊三)
- 第13章 手紙と独学—農民作家エミール・ギョマンと文通のロシアビリテ (横原茂)
- 第14章 大学拡張講義の講師たち—前世紀転換期オックスフォードの旅する教師 (安原義仁)

駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』(2007年)

- 序章 帝国と「文明の理想」—比較帝国史研究というアリーナで考える (駒込武)
- 第Ⅰ部 「王朝帝国」における求心力と遠心力
- 第1章 帝国・ユダヤ・教育経験—一九世紀ロシア帝国におけるユダヤ人教育の展開 (橋本伸也)
- 第2章 多民族帝国における多重言語能力の育成—モラヴィアにおける民族言語の相互習得をめぐる論争より (京極俊明)
- 第3章 帝国・共和国・帝国—ウィーンのチェコ系小学校コンメンスキー・シューレの現代史 (大津留厚)
- 第Ⅱ部 帝国日本における学校の不在・偏在・遍在
- 第4章 植民地近代社会における初等教育構造—朝鮮における非義務制と学校「普及」問題 (古川宣子)
- 第5章 蕃童教育所における就学者増大の具体相—台湾総督府の就学督励とその現実的基礎をめぐる (北村嘉恵)
- 第Ⅲ部 文明化のエージェント
- 第6章 現地人ミッション・エリートと教育の主体性—植民地ナイジェリアの中等教育問題を例として (井瀬瀬久美恵)
- 第7章 帝国・近代・ミッションスクール—ビョンヤンにおける「帝国内帝国」と崇実学校 (李省展)
- 第Ⅳ部 帝国空間のなかの女性たち
- 第8章 イギリス帝国と女性宣教師—一九世紀後半における女子教育と学校 (並河葉子)
- 第9章 「帝国」のリベラリズム—「ミッドル・グラウンド」としての東京女子大学 (小倉山ルイ)
- 第10章 『満洲』ツーリズムと学校・帝国空間・戦場—女子高等師範学校の「大陸旅行」記録を中心に (長志珠絵)

『比較教育社会史研究会通信』第6号をお届けいたします。

今号は、5月12・13日に青山学院大学で開催した研究会大会のシンポジウムと『帝国と学校』合評会、セッション「識字と読書」についてのまとめや大会参加記、シンポジウムで配布した研究会5年間の記録を掲載しました。

大会参加者は初日60名、2日目午前40～50名、午後40名、受付で記名された方は合計90名弱と、例年になく多くの方々にご参加いただくことができました。昨年に続いて2度目の東京開催でしたが、若い世代を中心に新参加者も多くおられました。両日ともたいへん有意義な時間を持てたことを、報告者の方々と参加者の皆さんに心よりお礼申し上げます。会場について格段のご配慮をいただいた青山学院大学の北本先生にも心より謝意を表させていただきます。

実は、昨年の第5回目の大会を終えた時点で、研究会のマンネリ化を危惧し、新たな出し物を発掘する困難さもあり、研究会を継続するのかどうか、継続する場合どのような主題と組織のあり方が良いのかを真剣に考えました。これまで研究会のお世話役や叢書の編者を務めていただいた方々にメールで問題を提起し、何人かの方々と直接お目にかかって議論もしてきました。その結果、これまでの到達と課題を明らかにする機会を持つことが確認され、今回のシンポジウムとして結実しました(そのうち私の報告は、「歴史のなかの教育と社会—教育社会史研究の到達と課題—」と題して『歴史学研究』8月号に掲載されます。ご覧下さい)。また、これまでの共同研究と叢書の作り方の長短を率直に反省して、ネットワーク型の開かれた研究会としての性格は堅持しつつ、共同研究では濃密な議論のできる組織化のあり方を追求することにしました。研究会通信前号で望田先生の提起された、後継世代は比較教育社会史草創期とは異なる歴史的状況にどう応答しようとするのかとの問いかけには、新しく「福祉国家と教育」「保護と遺棄の子ども史」という相互に密接なつながりのある、そしておそらく目下の時代状況を考えたときに切実な主題の部会を設定し、組織化を進めてきました。新しく何人かの方々にお世話役として参加いただくこともできました。また、『帝国と学校』については、本にするかどうかはともかく、積み残した課題に応えるための「帝国と学校・・・その後」というような部会を持つことも検討中です。

存続が自己目的化した官僚制的組織ではなく、解明されるべき課題を引き受けて考え続ける「知の運動」としての役割はまだ少しはありそうだというのが目下の研究会の意義であろうと思います。昨年はお休みした秋の研究会は、今年は11月頃に関西学院大学で行う方向で検討・調整しています。引き続き、みなさまのご支援を心より御願いたします。

橋本伸也

hashin@md.newweb.ne.jp / hashin@kwansei.ac.jp  
662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155  
関西学院大学文学部気付